

この本を薦めます

学会誌編集委員長 佐々木 葉

第4回



島津翔

日経BP社記者

ベテランが続いたので今回は若い方にお願ひしました。日経BP社の記者で、学会誌編集委員会の特別委員をお願いしている島津翔さんに、地域と人のつながりをめぐる3冊を選んでいただきました。

島

津さんは土木出身で、大学院修了後日経コンストラクシヨ

ンの記者となり、現在は日経アーキテクチュアを担当されている。学生時代は年に二、三百冊を耽読していたが、就職後はさすがに時間がとれず五十冊ほどに激減。そのため読む本を三種類に目的、つまり知識や情報を得る、娯楽、想像力を養うために区分して、フランスよく選んでいる。今回は想像力のための本から選んでいただいた。なかでもテーマは、地域と人との関係。



SHIMAZU Sho

1981年生まれ。名古屋大学工学部社会環境工学科卒、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻修了。2008年、日経BP社入社、日経コンストラクションに配属。

この3冊は、いずれも東日本大震災後に読まれた。震災直後から現地に入り、多くの取材を重ねながらも、土地に根ざして生きていた人びとがその土地を失うことの意味を伝えられないもどかしさを感じる。そのとき、これらの本に手を伸ばした。

まず『北の無人駅から』は、ドラマ『北の国から』にあこがれて北海道に渡ったフリーライター渡辺一史によるもの。北海道各地のなぜここに人が、駅が、と思われる場所に着目したルポルタージュである。無人駅そのものというよりは、そこから始まる地域と人の生活に迫り、暮らしの原点をひもとき、時代の変化の意味をも問う。よそ者である著者は、ただか数週間の取材で何が書けるのかという疑問を抱きつつ、時間をかけて土地の人と付き合う姿勢を貫こうとする。本書のための

取材は8年に及んでいる。一瞬で目が必要な言葉が積みだされるまでに要した時間を想像しながら読んでみたい。『オオカミの護符』は、いまやすっかり都市化した川崎市宮前区の近い過去をたどる物語である。1963年生まれの著者が、開発による便利さの恩恵にあずかりながら、置き忘れてきた何か大切なものに真剣に向き合おうとしたとき、実家の土蔵に祖父が貼っていたオオカミの絵が描かれた護符に目が留まる。それにまつわる個人的取材は遂に記録映画を製作するまでにいたり、何百年も続いているがほんの少し昔に急に見えなくなりかけた御嶽信仰の形を浮かび上がらせていく。民俗学や歴史学研究とは大きく異なり、徹底的に主観を通じて語られる言葉は、

最後の『日常という名の鏡』は、映画監督佐藤真によるドキュメンタリー映画論のアンソロジーである。新潟水俣病の舞台となった阿賀野川流域に暮らす3組の老夫婦を追った映画『阿賀に生きる』を中心に、撮影、編集、日常、現代といった切り口でノートが綴られる。実は阿賀は島津さんの故郷であり、自らが生きた地域の物語を記録した人物によるこの本は、折に触れて手に取り、読み返すと言う。たくさんの小さな付せん紙が貼られていた。それぞれの本が対象とする場所を、ちよつとディープな旅をするように読み、さらに少し視点をずらすと、語られていることの向こうにまた扉が開いていく。ベストセラーでは得られない感覚を味わえる本だと思う。

さすががいい。

北の無人駅から
渡辺一史：北海道新聞社

オオカミの護符
小倉美恵子：新潮社

日常という名の鏡
—ドキュメンタリー映画の界隈—
佐藤真：凱風社